

Title	安南松本寺釣り鐘と泰徳通寶
Sub Title	
Author	金, 永鍵(Kin, Eiken)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.77- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安南松本寺釣り鐘と泰德通寶

金 永 鍵

本寺が有るのみである。

(一) 遠くは川島元次郎氏の『徳川初期の海外貿易家』(大正三年・東京・仁友社)から近くは岩生成一氏の『南洋日本町の盛衰』(昭和十年・臺北帝國大學

文政學部史學科研究年報』第二輯)に至る迄、永い間、多くの人達が、第十七世紀の初葉に於ける日本と安南(その當時は交趾)との貿易その他の關係を論じ、その度ごとに、廣南の會舗に在つた日本町のことを持ち出された。

この日本町の位置が何處であつたか?を決定するの唯一の手が、りと成り得るのは、たゞ、松

それは寛文十年(一六七〇年)、即ち安南では黎朝に於ける玄尊黎維禱の景治八年(廣南朝に於ける賢主阮福湊の庚戌二十二年)のことであつた。

その時、安南の川内(交趾||廣南||會舗)に住むで居た角屋七郎兵衛は阮氏と云ふ安南の女と暮して居たが、日本に居る荒木勘左衛門と久左衛門とに宛てた、五月の日附けの手紙で、彼が建てた松本寺の爲に額と釣り鐘とを注文して居る。

それに依ればこの寺は南向きで川に面して居るが、その川上、即ち西は唐人町で、その川下、即ち東は日本町で、その北は安南町であつた筈であ

る。

不幸にして、いまはこの日本町の位置が何處であつたか？さつぱり分らない。

それでは、松本寺は何うなつたか？この寺が建てられてから半世紀と経たぬ中に、會舗は、あの悲惨な西山の亂に見舞はれた。若し、この亂を通して、松本寺が無事であつたとすれば、それは見付かるかも知れぬ。そして、その額も見付かるかも知れぬ。

然し、それにしても、その釣り鐘だけは、或る奇蹟にでも依らなければ、もう見付かる見込みは無いと信ずる。却つて、永い歳月を経ても釣り鐘だけは良く保たれてゐるだらうと想像して居た人達は、意外に失望するかも知れぬ。次が私の卑見である。

(二)

これに就いて先づ思ひ出されるのは松本信廣先生が『銅鼓に關する二三の安南資料』(一)(『史學』第十四卷・第二號、昭和十年八月、餘白録、一〇(一九二頁)に引用された范氏の『群書參考』の中の次の一節である。

『本朝嘉隆程錄。内載銅鼓山之銅鼓。爲西山所取。載歸海道。遇風覆沒。未幾銅鼓見于銅鼓山下江津水中。邑人取之。復歸于神祠。』

銅鼓山は可牽山とも稱するが清化省安定縣の西なる多泥社に在つてその山中の神祠に祭られた銅鼓は昔から神聖なるものとされた。

さて、西山の亂とは、人も知る、阮文岳阮文惠阮文呂の三人兄弟が歸仁を中心として起した安南の『三國誌』劇である。彼等は廣南の阮氏と黎朝の鄭氏とを相手に印度支那を席卷したことさへある猛威を振つた。その爲に黎朝と鄭氏は亡び、廣南朝が亡んで阮朝が立つたのである。斯る幾多の

重大な事件を目眩しいまでに惹き起した西山の亂が續いたのはたつた三十年間、即ち一七七三年（黎顯宗景興三四年）から一八〇二年（阮世祖嘉隆元年）まで、その烈しかつたことが自ら慄ばれるであらう。

阮文惠が東京を攻める爲に初めて清化へ入つたのは一七八六年のことである。續いて阮文岳も彼に従つた。だから、彼等西山の徒が銅鼓山の銅鼓を取つて歸らうとしたのは一七八六年以後のことである。

それは何の爲であつたか？

即ち、銅鼓で以て銅貨を鑄造する爲であつた！普通なら迷信深い安南人達が昔から神聖なものとして銅鼓山の銅鼓等に手を觸れるのは思ふたゞけでも罪なことゝされた筈なのに、それを取つて銅貨に鑄直さんとした彼等の頭も餘程狂うて居たらしい。

これは清化の銅鼓についての一例に過ぎないが、次に、會舖に於ける西山の亂の跡を調べて見やう。

(三)

それは一七七八年のことであつた。即ち、西山の亂が起つて六年目である。一七七四年に阮文岳はもう廣南の地方へ兵を進めた。殊に會舖はそこに住んで居た廣東生れの華僑である李才が和義軍を集亭が忠義軍を起して、廣南朝の權臣であつた張福鸞に對する反感から眞先に西山の亂に加擔したので初めからその兵火を蒙らざるを得なかつた。西山の亂が起るや黎朝の權臣であつた鄭森は廣南朝の阮福淳を亡す爲に名將黃五福を遣つて富春、即ち順化を占領させた。阮福淳は廣南を経て西貢に逃れたが一七七七年に至つて西山の亂の犠牲となつた。翌年、意氣天を衝かんばかりの阮文岳

は歸仁で年號を泰徳と定めて有名な『泰徳通寶』といふ銅貨を鑄造させたのである。

丁度、その一七七八年の八月十三日に會舗へ着いたのが英吉利人チャップマン (Chapman) であつた。その次第は斯うである。阮福淳の甥に當る廣南朝の後裔、阮福映——後の嘉隆皇帝で阮朝の始祖——は一時西貢を取り戻し得た。そして、初めて王位に登つた。その時、印度のベンガルに在つた英吉利東印度會社の船、ルムボールド (Rumbold) 號は支那からの歸りに二人の交趾支那人(安南人)を連れて西貢に歸つた。印度の總督は彼等を阮福映に送り返し、そのお蔭で交趾支那安南へ英吉利の商館を建てる積りでジェンニキ (Jenny) 號とアマゾン (Amazon) 號の二艘の船を出しチャップマンをして印度支那へ向はしめた。詳細は省くが、兎に角、斯る次第で、西山の亂の眞最中に會舗にやつて來たのが彼である。^(註)

だからして、次に引く彼の言だけは西山の亂を目撃したもの、證言として充分に信ず可きである。

『會舗に着いて、我々は其處に整然とした區劃の上に煉瓦で築いた建物で取りかこまれた道路は舗石を敷きつめて四通八達して居た大きな都市の幾許も立たぬ廢墟しか見當ら無いのに驚かされた。

噫呼！これ等の建物はたゞ外墻を残すのみである、そしてこれ等の墻根の裏には縦へ昔日には宮殿の主であつた身でも見すばらしい藁や竹の小屋の内で冷い風を避けなければならぬやう落ちぶれて仕舞つた。獨り寺院のみが禍ひを受けぬのみである、偶像は尙ほそこに居る、そして取り上げたのはたゞ錢貨に鑄直す爲の釣り鐘だけであつた。

《En arrivant à Faifo, nous fûmes surpris de n'y trouver que les ruines récentes d'une grande ville dont les rues, bien percées et pavées en dalles,

avoient été bordées de maisons bâties en briques sur un plan régulier. Il ne restoit, hélas ! de ces maisons que les murs intérieurs ; et derrière ces murs, tel qui jadis avoit été propriétaire d'un palais, étoit réduit à se garantir des injures de l'air sous une misérable hutte de paille et de bambous. Les temples seuls n'avoient point souffert ; les idoles y étoient encore, et l'on n'en avoit enlevé que les cloches pour les convertir en monnaie.》

これで本論文で述べんとした私の卑見も稍、明白りして來たと思ふ。斯くの如く西山の亂の折りに會舗の釣り鐘は銅貨に鑄直す爲に取り上げられたのであるから、松本寺のそれももう見付かる見込みは無いと信ずる。却つてその額や寺そのものは残つて居るかも知れぬが、その兵火なるものが一通りのもので無かつたゞけ、これとて、極めて心細い次第である。

安南松本寺釣り鐘と泰徳通寶(金)

それでは、會舗の釣り鐘を取つて銅貨に鑄造したものは誰か？勿論、西山の王と自稱してゐた阮文岳に違ひ無い。つまり、一七七四年から一七七七年までに廣南を荒らした阮文岳は、松本寺の釣り鐘を取つて、一七七八年に『泰徳通寶』錢を鑄造したのである。我等は西山の徒が銅鼓を取り上げた例を清化の銅鼓山でも見た。

尤も、西山朝では、阮文惠も『光中通寶』とか『光中大寶』とかの銅貨を鑄造して居り、その子の阮光纘も『景盛通寶』とか『景盛大寶』とか或は『寶興通寶』とかの銅貨を鑄造して居る。然し、何れも、一七八八年から一八〇一年までのことである年代がずつと下る。

或ひは、會舗の釣り鐘で銅貨を鑄造したのは黎朝では無いだらうかといふ疑問が生ずるかも知れぬ。といふのは、鄭氏は一七七四年から一七八六年まで順化を占領して廣南にも兵を入れたからで

ある、のみならず、後でも述べるが、黎朝でも釣り鐘で銅貨を鑄造した例はあつた。然し、會舖をあれ迄悲惨に叩きつぶしたのは鄭森の兵の力とは思はれぬ。一七七四年に、彼の部將、黃五福が順化を占領して廣南朝の最後の阮福淳を西貢に逐ひ出し、序でに、出來得るなら西山の亂も平げて見る

野心で廣南の海雲關まで兵を入れたことはあつた。そして一七七五年には、富安で阮福淳の忠臣であつた宋福洽の義兵が起つたので背腹に敵を受けた阮文岳は不利を覺り、先づ宋福洽を討つ爲に黃五福に降伏をしたので黃五福は廣南では別に阮文岳と戦つてゐない。のみならず、黃五福は阮文岳に西山長校壯節將軍までさせた。然し、宋福洽を煙岡で破つた阮文岳は直ちに一七七六年には西貢を占領し、自ら西山の王と稱し、再び廣南を荒し出した。この時、黃五福は阮文岳を討つて仕舞はうとしたが、珠塲で病氣になつたので失敗に歸

した。そして鄭森も黃五福の舉をそこまでは感心せず、一七七七年には却つて阮文岳に廣南鎮守慰大使恭國公をさせてやつた。そこで、阮文岳は弟の阮文惠をして再び西貢を討たせ、阮福淳の一族を亡して一七七八年には歸仁で『泰德通寶』なる銅貨を鑄造させたのである。(註二)

以上に述べた如く、一七七四年から一七八六年まで鄭氏が順化を占領してゐたとはいふもの、廣南の實權を握つてゐたのは矢張り西山の阮文岳であつた。のみならず一七八六年に亡くなつた黎顯尊黎維桃が『景興通寶』を鑄る爲に、會舖の釣り鐘を利用したとは思はれぬ。そして、一七八七年から阮文惠の保護の下にゐた黎愍帝黎維祚も『昭統通寶』を鑄造したし、清室の保護の下に亡命した時は『乾隆通寶』も鑄造したが、何れも年代がずつと下る。況や、阮世祖阮福映が『嘉隆通寶』を鑄たのは第十九世紀の初めのことである。

その上、チャップマンの記述は確かに阮文岳に依つて荒らされた會舗のことだからして、その時に、取り上げられた、釣り鐘は『泰德通寶』を鑄造する爲であつたと信する所以である。

(註一) チャップマン (Chapman) が、この『交趾支那旅行記』を初めて発表したのは、西山の亂も寶興の阮光纘に至つて將に終りを告げ嘉隆の阮福暎が阮祖を建てんとした一八〇一年のことだといふが、それが發表された『亞細亞年報』(Asiatic Annual Register) を私は見て居ない。然し、一八〇九年に、これは『Relation d'un Voyage à Cochinchine』として英吉利語から佛蘭西語に譯された。私の引用したのはこの後者からであるが、非常に有益な旅行記で、詳細は、一八〇九年、マルト・ブルン (Malte-Brun) の編纂で、巴里の、F・ブキソン (Buisson) 書肆から出して居る、『歴史・地理旅行年表』(Annales des Voyages de la Géographie et de l'Histoire)、第七卷、第五—七五頁に出ている。それには當時の會舗の川の圖も載つてゐるが私の引用したのは第三四三頁からである。

(註二) 西山の亂の際、廣南、別けても會舗が、西山の阮氏、黎朝の鄭氏、そして、廣南の阮氏の何れの勢力の下に何時から何時まで入つて居たかを明白りさせるのは困難だと思ふ。殊に、西山の阮氏と黎朝の鄭氏とは大分長い間等しく廣南に

安南松本寺釣り鐘と泰德通寶(金)

勢力を張つて居たので、會舗の釣り鐘を取り上げたのが誰かを定めるのは周到な用意をばらばらされる。然し、黎愷氏からそれが黎朝の鄭氏ではないだらうかと疑ひを挟まれた時、初めから私は不服であつた。

西山の亂は内容が複雑な割りに史料が豊富だとは云へ無い。C・B・メキボン (Maybon) 氏の『現代安南國史』(Histoire moderne du pays d'Annam) (E里・Plon 書肆) は固有名詞が全部羅馬字で現はされてゐるので我々には不便が多い。それで、差し當り、私は野史ではあるが、黃道成の『西山始末記』—『西山外史』『西山述略』『西山列傳正編』『西山邦交錄』等を利用し年代は成る可く正史に依つた積りである。

(四)

上に述べた如く西山の亂の續いた年代は永いとは云へ無いが悲惨なものであつた。

一七九二年と一七九三年とに交趾支那(安南)へ來たことのある英吉利人ジョン・バロウ (John Barrow) も會舗の廢墟に就いて述べてゐる。西山の亂に依つて『一七九三年には、交趾支那との貿易の状態が如何なる國に取つても大した物には成

らないやうになつた』とまで彼は云つて居る。^(註三)一七九三年と云へば、阮文岳阮文惠も死し、彼等の子の阮文寶、阮光纘の世となつて西山の亂も第二段階に入つた時分である。

(註三) ジョン・バロウ (John Barrow) 『交趾支那への旅』 (A Voyage to CochinChina) 倫敦、T・カデル (Cadel) 及び W・デウキース (Davies) 書肆、一八〇六年、二五〇、三一、三四九頁。

同、『交趾支那への旅』 (Voyage à la Cochinchine) ムルト・ブルン (Malte-Brun) の佛蘭西語譯、巴里、フランソア・ブイソン (François Buisson) 書肆、一八〇七年、第二卷、一九二、二七六、三二八頁参照。

(五)

一體に、昔から安南には銅が少かつた。そこで、安南で流通された銅貨は支那か日本のそれであつた。徳川幕府が鎖國の政策を取つてからも暫くは、日本と安南との貿易を續けて居た支那人や和蘭陀人達も日本の銅貨と安南の絹織とを交換して

利益を得るのが主であつた。これに就いては、岩生成一氏が『江戸時代に於ける銅錢の海外輸出に就いて』(『史學雜誌』第三十九編、第十一號、昭和三年十一月、九八—一一〇(一一一—一二三〇頁))述べられたことを参照すれば分る。そして、バタビアの總督府は會舗の和蘭陀商館を通じて、安南で流通さすべき銅貨の鑄造を一手に引き受けやうとしたことゝある。W・J・M・ブック (Buch)、『印度支那と和蘭陀東印度會社』(La Cie des Indes Néerlandaises et l'Indochine)、河内、『佛蘭西遠東博古學院報』(Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient) 第三十六卷、一九三六年、参照)。そして、第十八世紀の中頃、安南で銅貨の輸入に如何に苦心したかは、高春育の『國朝史撮要』、前編、卷一、三二頁や黎貴惇の『撫邊雜錄』卷四、二三、三五頁等に、屢々外國の船に對する無暴な關稅を思ひ切つて引き下げたことに依つても分

る。

そして、先に私は銅鐘を以て銅貨を鑄造したのは黎朝に於ても同じことであつたことを述べた。即ち、黎朝の終りといふよりも、阮朝の初めの嘉隆の時の人といつた方が良いが、阮保といふ人の書いた『黎季記事』第四六頁、A、には、黎愍帝の紹統元年丁未（一七八七年）の條に次のやうなことが書いてある。

『盡括天下寺院銅線銅鐘銅磬。以充軍用。時府庫空匱。軍需太急。催承徵糧錢。不敷支度。整奏請括佛（佛）寺銅器。畢付錢廠毀鑄造錢幣。國用漸裕』
こゝに整といふのは阮有整のことである。彼はもと黎朝の遺臣であつた。所が鄭氏一族に對する不満からして西山の亂に加擔したものである。そして、一七八六年に阮文惠を誘つて、順化に居た鄭氏の殘軍を討つたのも彼の策である。そして、同一年に、阮文岳の反對にも拘らず、阮文惠を誘

つて、昇龍、即ち河内を陥れ鄭氏を平げたのも彼の策である。

一七八六年に阮文惠は河内に永く留ることが出来なかつた。それは彼の勢力を妬んで居た兄の阮文岳が彼を間も無く順化に連れ戻したからである。それから、再び阮文惠が河内へやつてきて謀反の嫌疑で阮有整が左遷されるまで彼は河内の留守をしてゐた。

一七八六年に黎顯尊黎維桃が亡くなられる時、王はその子、黎愍帝の黎維祁を阮文惠に托されたので阮有整が河内で阮文惠の不在に乗じて、自分の勢力を擅にするには極めて都合が良かった。實を云へば、黎維祁を愍帝として王位につかせ紹統と年號を定めたのも阮文惠であつたのである。

その時、銅貨の必要に迫られ阮有整は黎愍帝に奏請して天下の佛寺の銅器なら、銅鐘のみならず、銅線銅磬まで打ち毀したその狼藉たる有様は上に

引いた一文で明白であらう。この時に鑄造した銅貨は『紹統通寶』といふものである。

間も無く、黎愍帝は清朝に走つて一七八九年には再び河内へ上つた阮文惠の爲に黎朝も終りを告げるが、この頃、鑄造したかと思はれる『乾隆通寶』なるものに就いて私は知る所がない。

阮文惠は阮文岳と違つて知勇を兼ねて居た人物なので鄭氏を憎んでは居たもの、黎朝だけは阮氏を亡してまでも助けようと思つたらしい。然しこれは餘談に走るからして、長く述べまい。兎に角、以上のやうな事情からか推して、會舗の釣り鐘を銅貨に鑄造したといふチャップマンの證言も益々信じたくなる。そして、松本寺の釣り鐘が『泰徳通寶』に成つたらうといふ私の卑見も根據が付いて來たと思ふ。

この松本寺の釣り鐘があたかも彼の銅鼓山の銅鼓のやうに奇蹟的にでも西山の亂を逃れて居ない

限り、この釣り鐘はもう見付かる見込みは無いらう。

(六)

今日、會舗にいつてみても、銅鐘なるものが少くはない。然し、何れも、廣東か潮州かでなければ海南から來てゐた支那人達が造つたもので、年代の古いものは見當らない。たゞ、會舗ではないが、そこを流れる川に沿うて東へ行き殆んど海の邊りへまで出ると、福澤といふ村に年代の不明な大きな釣り鐘がある。それにはたゞ、『龍安』の二字が書いてあるのみである。もと、この釣り鐘は、會舗に在つたものだといふ。その釣り鐘のあつた寺はもう廢墟である。然し、その近所には『會龍福安。順寂老僧善上善下志堅公之墓。歲在甲寅九月二十日往春吉旦』とか『孝徒衆等菴勒石。資福。順寂老僧廣□聰公之墓』とかの碑銘のあ

る墓がある。『龍安』を『安龍』と讀むのか『會龍

福安』を『安福龍會』と讀むのかは知らぬが、兩

者に何かの關係があるかも知らぬ。ことに、A・

サレー (Sallé) 氏は『古會舖』(Le Vieux Fatfo)

〔『古順化同友會誌』(Bulletin des Amis du Vieux

Hue)、一九一九年、五一四—五一五頁)でこれ等

が日本の僧の墓だと云ふて居る。そして、その近

所には會舖に住んで居た堺の具足君や潘二郎純信

や彌次郎兵衛谷公などの墓もある。それで、A・

サレー氏も斯る勝手な想像をこらしたかも知らぬ

が、然し、何か的確な史料の見付らぬ限り、さう、

易々と、これ等が日本の僧の墓とは信じられぬ。

それで、これ等の墓と何かの關係はあつても釣り

鐘が松本寺のそれ等とは思はれなかつた。兎に角

『貳尺五寸巡り津りがね』だつたといふこの壹句

の鐘には、少くとも、『景治捌年。信主號福榮角屋

七郎兵衛信主法號妙太戸工如院阮氏寓』の銘ぐら

ゐは入つて居る筈である。

却つて、櫻井祐吉氏の『安南貿易家角屋七郎兵

衛附松本一族』(三重縣、角屋七郎兵衛贈位報告祭

協贊會、昭和四年)に出てゐるやうな、松本寺の

圖かその額の圖か角屋家文書に記されたやうな額

の覺え書き等に依つて、松本寺の跡を探するのが得

かも知れぬ。(昭和十二年十二月二十二日河内に

て。)